

研究だより



香川大学教育学部附属 坂出小学校

< 目 次 >

教育研究発表会第1次案内	1～2	特別支援教室「すばる」の取り組み	7
「思考力」の育成に向けて	3～4	附属坂出小学校へのアクセス・研究図書紹介	8
3学期の研究授業から	5～7		

第89回附属坂出小学校教育研究発表会のご案内

21世紀を切り拓く「確かな学力」の向上(3年次)

－ 「思考力」を育成する授業コーディネート －

ごあいさつ

校長 高井 忠昌

本校では平成15年度から「測りにくい、しかし、学力の中核を為す資質・能力」である「思考力」に焦点を当て研究を進めてまいりました。そして、各教科・領域で育成したい「思考力」を明らかにするとともに、その育成に向けて単元レベル・学習指導レベル・評価レベルでの支援を探ってまいりました。本年度は学習指導レベルに研究の重点をおき、授業をコ-ディネ-トする支援について研究をしています。

平成17年5月に研究発表会を開催します。本校にお越し頂きご指導、ご助言を賜れば幸いに存じます。

とき 平成17年5月26日(木)・27日(金)

場所 香川大学教育学部附属坂出小学校

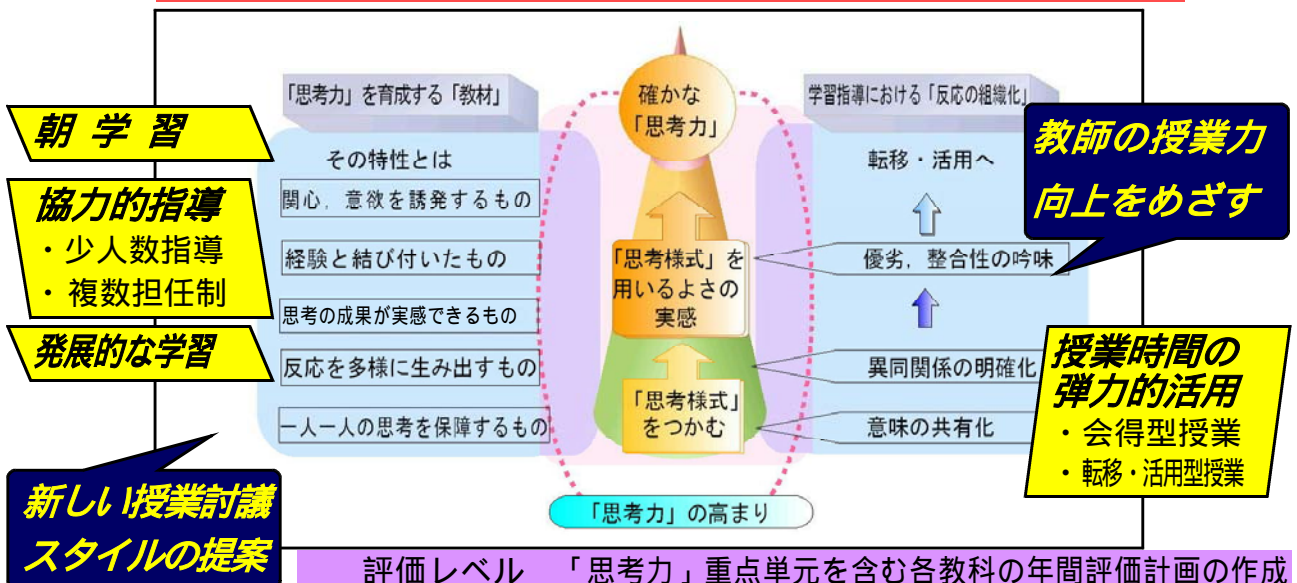
研究内容

「思考力」育成に向けて

目標レベル 各教科・領域における「思考の質」に着目した「思考力」の分析・明確化

単元レベル 「思考力」を育成する教材開発と教材の組織のモデル化

学習指導レベル ～ 「思考力」を育成する授業コーディネート～



評価レベル 「思考力」重点単元を含む各教科の年間評価計画の作成


シンポジウム・講演のご案内

研究会1日目の午後は、3人の先生方をゲストとしてお招きし、シンポジウムを開催いたします。また、2日目の午後は、日本女子大学の吉崎静夫先生より「新教育課程で育てる学力と新しい授業づくり」という演題でご講演をいただきます。全国でご活躍されている先生方の貴重なお話を伺えるまたとない機会です。ぜひ、お越し下さい。

5月26日(木) シンポジウム ゲストの紹介

 <p>木原 俊行 先生</p> <p>[大阪市立大学大学院文学研究科] 研究領域：授業研究を中心とする 教育工学，教育方法学</p> <p>主な著書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・[学習指導・評価]実践チェックリスト 教育開発研究所 ・NHK学校放送 先生のための教え方ガイド 日本放送出版協会 ・授業研究と教師の成長 日本文教出版 	 <p>鶴田 清司 先生</p> <p>[都留文科大学文学部] 研究領域：国語科教育全般 教育方法学</p> <p>主な著書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語の基礎学力を育てる ～学力保障・言語技術・絶対評価～ ・文学教材の読解主義を超える ・「大造じいさんとガン」の 解釈 と 分析 ・言語技術教育としての文学教材の指導 <いずれも明治図書より> 	 <p>佐藤 真 先生</p> <p>[兵庫教育大学] 研究領域：学校教育学 教師教育学</p> <p>主な著書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「総合的な学習」実践分析と展開の急所 学事出版 ・基礎からわかるポートフォリオのつくり方・すすめ方 東洋館出版社 ・今日から始める絶対評価の基礎・基本 教育開発研究所
--	---	--

5月27日(金) 講演の講師紹介

<p>演題 『新教育課程で育てる学力と新しい授業づくり』</p>		
<p>日本女子大学人間社会学部教授 吉崎 静夫 先生</p>		
<p>【略歴】</p> <p>1973年3月 茨城大学文学部卒業</p> <p>1975年3月 九州大学大学院修了</p> <p>1978年3月 九州大学大学院教育学研究科博士課程単位取得満期退学</p> <p>1978年4月 大阪大学人間科学部助手</p> <p>1983年4月 鳴門教育大学学校教育学部専任講師</p> <p>1986年4月 鳴門教育大学学校教育学部助教授</p> <p>1993年4月 日本女子大学人間社会学部教授</p>	<p>【主な著書】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の意志決定と授業研究 ぎょうせい ・デザイナーとしての教師 アクターとしての教師 金子書房 ・総合的学習の授業づくり ぎょうせい ・多様な指導方法への経営戦略 教育開発研究所 ・新教育課程で育てる学力と新しい授業づくり ぎょうせい <p>【受賞】</p> <p>日本教育工学会論文賞受賞(1989)</p>	

資料のご案内

「すぐ使える！ 全学年・全教科評価基準表 ー新教科書準拠版ー」

来年度より教科書が改訂され、各校では、評価基準の見直しを行う必要があるかと思えます。

本校では昨年度より、新教科書に準拠した評価基準の作成に取りかかり、このほど完成に至りました。「思考力」重点単元の配置、発展的な学習での評価など、本校独自の評価基準を盛り込んだものになっています。

本研究会の折、ご参会の先生方全てに進呈いたします。各校での評価基準作成の際のご参考にさせていただければ幸いです。

「思考力」の育成に向けて

昨年度までの取り組み

目標レベル

吟味すべき「思考力」を教師間で共有化するために、「～を考える」「～を工夫する」と表現されがちだった思考に関する目標を「～できる」等、外部に表出する何らかの行為として設定しました。

単元レベル

<教材の条件>

思考活動への「関心・意欲・態度」を誘発するもの
子どもの経験と結び付いたもの
問題解決によって、思考活動の成果が子どもに実感できるもの

<教材の組織と指導体制>

思考活動を十分に保障した配列
身に付けた「思考力」が転移・活用できるような配列
「基礎・基本」を保障し、「豊かな学力」を伸長する配列
(4つの教材配列のパターンと少人数指導・複数担任制)

学習指導レベル

経験との結び付け・・・ 経験を補う(思考の基となる経験を補う), 経験を耕す(問題と経験を結び付ける)
思考様式の意識付け・・・ 表出(思考の道筋の表出), 集団吟味(よさの実感), 一般化(思考様式へ一般化)
思考様式の転移・活用・・・ 同一思考様式の活用, 多様な思考様式の活用

評価レベル

「基礎・基本(A, B)」「豊かな学力(S)」といった学習状況の判断基準として設定するだけでなく、子どもの具体的な反応例を明示することによって、「思考力」の測り方の妥当性を吟味しやすくしました。

(昨年度研究紀要より)

本年度の取り組み

「思考力」育成に向けた上記の取り組みは、昨年5月に開催した本校研究発表会や香川県下の公立小学校へのアンケート調査より、概ね支持されていることが明らかとなり、今後も継続して研究していただくの価値を見出すことができました。と同時に、今、教育現場では、1時間の学習指導をどう成立させるかという、教師の授業力が問われていることを再確認することもできました。

確かに、「思考力」育成の直接の鍵を握るのは、実際の授業の中で用いられる教材とその教材を受け取った子どもの反応、及びそれらの反応を組み立てていく教師の言動です。昨年の研究発表会における公開授業後の研究協議会でも、授業で用いられた教材や子どもの反応に対する教師の指示、助言等の妥当性に関して活発な意見交換がなされました。

そこで、私たちはこれまでの研究の成果を踏まえながらも、学習指導レベルにおける教師の働きかけや役割(本校では「授業コーディネート」と呼ぶ)に研究の重心を移したいと考えました。

本年度は、授業コーディネートとして、大きく以下の2つの視点から研究に取り組んでいます。

学習指導における「教材」

本校では、「教材」を「学習問題」「文字・視聴覚資料」「体験・実物資料」「学習像」のいずれかの形をもって存在しているものであり、授業前に準備可能な比較的安全性のあるものとして捉えています。

単元レベルにおける「教材」よりも、より具体的な形で提示されます。

「反応の組織化」への支援

正答、誤答にかかわらず、子どもの反応を絡め合わせながら、子ども自身が答を見付けていくように組織していく方法です。「自分たちには、問題を解決していく力がある」という、思考を働かせる原動力となる自信を培うことのできるような反応の組織化をめざしています。

以下、これらに関する本年度の取り組みについて紹介します。

学習指導における「教材」

「教材」とは、「思考力」を育成するための手だての一つです。それは、後述の「反応の組織化」に値する子どもの反応を生み出すことのできるものでなければなりません。これまで、単元レベルでの教材開発の条件を明らかにしてまいりましたが、それに加え、学習指導レベルでの条件を考えてみました。

子どもの反応を多様に生み出させるものであること

画一的な反応だけで学習を進めてしまった場合、その反応の妥当性や有効性は吟味することはできません。子ども自身もその価値を容易には納得できないでしょう。複数の反応を比較検討することを通してこそ有効性を吟味できるのです。

ここでいう多様な反応とは、単に数のことではありません。その中に、本時でねらう（身に付けさせるべき）思考様式が直接含まれているか、あるいは結果的にその中から生み出せるものを意味します。こうした教材を開発する必要があります。

一人一人の子どもに思考を保障するものであること

何よりも、一人一人が自分の考えをもつことができることを前提条件としなければならないと考えています。そのためには、例えば、子どもに課題の解決方法の見通しをもたせるための教材Aをあらかじめ用意しておき、その教材Aとそれを活用して解決していく教材Bとを組み合わせます。また、子どもに自分の立場を明確にさせ、その根拠をもたせるような学習問題を設定することも考えられます。

「反応の組織化」への支援

子どもの反応には、「意味に関する質問」「異なる意見の表明」「反論」・・・など、実に様々なものがあります。これらの反応が無秩序に交錯する授業だと、2つ以上の思考を同時に働かせたり、瞬時に別の思考に切り替えたりする能力が要求され、頭の中が整理できない子どもは、教室の片隅へと追いやられてしまいます。

こう考えてみると、「反応の組織化」においては、子どもの思考が分散しないように心がけることが望ましいことが分かります。反応と反応の間にある様々な関係のうちのある一部分だけに集中して、エネルギーを注ぐことができるように組織するのです。そうすれば、子どもたちの思考も分散しません。

意味の共有化

自他の意見が指し示す内容について共有化しておかないと、概念的な思考に陥ります。
共有化されていないのは「ものごとの意味」か「ものごとの関係」かを見極めよう
共有化を図るべきことについて、まずは子ども同士で説明し合うよう組織しよう
教科、教材の特性に応じ、具体化という点から、「意味の共有化」を図ろう

異同関係の明確化

自他の意見、根拠の異同関係を整理しておくことで、後の交流が効果的に行われます。
同じ意見、同じ根拠を連続させ、まとまりごとに組織しよう
発言者にも前者との異同関係を意識させるような発言の仕方を指導しよう

優劣、整合性の吟味

複数の意見群を比較しながらよりよいものを見付け出したり（「優劣の吟味」）、各意見と課題・基準を照らし合わせたり（「整合性の吟味」）することも重要です。

「反論」を軸に組織しよう
一つの論点をきちんと解決してから、別の論点に移っていくよう組織しよう

研究会当日（5 / 26, 27）には、実際の授業をもとに、上記の取り組みについて提案します。尚、詳しくは第2次案内（4月下旬）をご覧ください。

3 学期の研究授業から

体育科



まつうらまさひろ
松浦 正裕



はたけやまみなこ
畠山美菜子

1年 なわとびでなかよし

自分でなわを回し自分でとぶ1人跳び、友だちが回すなわに入っていく3人跳び。それぞれの跳び方を生かして、1本のなわを2人で回す横並び跳びに挑戦しました。

前跳びが100回近くも跳べたり、グループ毎の3人跳びが上手にできるようになったりして、やる気満々の子どもたち。「つまさきでトントンと跳ぶといいよ。」「手を広げすぎないようにしよう。」跳び方のコツに目が向いている子どももいます。

しかし、最初のチャレンジは失敗が続出しました。それぞれのなわを回す速さや跳ぶタイミングが異なるためか、なかなかうまくいかなかったようです。

「どうすればうまく跳べるだろう？」みんなで横並び跳びのコツを探っていました。



「2人があまり離れないようにしましょう。」...言葉だけでは分からないことは、実演も交えてその意味を共有化していきます。また、子どもたちから出された様々なコツを体の部位を描いた絵に示したり、「跳ぶこと」と「回すこと」に大別したりして分かりやすく整理していきます。

「2人の息を合わせる」ことは、そのコツを言葉で捉えるより、「音」に置き換えた方が子どもの経験と結び付きやすいようです。跳ぶタイミングを合わせるために鈴付の靴で一緒に跳んだり、半切りのなわを一緒に回して速さを合わせたり、と工夫しながら練習を重ね、少しずつ上達していく様子を見ることができました。

家庭科



はまさきよしえ
濱崎 良重

5年 冬のファッションコーディネートをめざそう



冬の快適なファッションについて、コ・ディネートできるように「衣服内気候」に関する衣服の色、形、布地等の多様な観点から検証していく学習を展開しました。子どもたちは、「ふわふわもこもこした濃い色の衣服が暖かい」ことを経験や実験から見出していました。

そこで「動かない空気を着る」という新たな観点に気付くように「重ね着」の工夫について取り上げました。すると、内側に空気いっぱいの衣服、外側に風を通さない衣服を重ねるという順序性を重ね方のコツとして見出しました。子どもたちは、首やそで口の隙間から入る風「動く空気」が暖かさに関係していることには気付いていました。しかし、衣服と衣服との間の「動かない空気」も暖かさに関係していることはなかなか見出せないようでした。そこで、人体に衣服を着せていたり、断面図で空気的位置を視覚的に把握させたりして、きつめとゆるめの着方の異同関係に気付かせていきました。

この後、空気層と暖かさの関係を検証するために手袋体感実験、缶による保温実験へ…。空気の保温効果を実感し「動かない空気を着る」というコツを見出した子どもたちは、その観点を中心に自分の衣服の着方を見直していきました。



生活科



まなべ よしき
真鍋 佳樹



なかおしみず えり
仲尾次 瑞枝

2年 もっと知りたい、伝えたい！自分のこと、みんなのこと！ — 「アンケートづくり」 —

「真鍋先生。もしかして、『2年東組の好きなテレビ番組アンケート』の集計をしてないの？」(T2)

「実は…。でも仲尾次先生は、男子の集計をしているよね。それをクラスの結果にしよう。」(T1)

こんな役割演技から授業はスタートしました。子どもたちは反論を繰り返します。

「男の子の好きな番組と女の子の好きな番組は違うから、だめだよ。」

「男の子と女の子の人数が違うのだから、2倍したらいけないよ。」



男女の好みの違いを具体的に語らせたり、2倍するとどうなるのかを計算させたりすることで、意味の共有化を図りました。教師も一人一人の意見に納得せざるを得ません。女子の結果もみんなで集計していくことになりました。ここでは、数を入力すれば、その数値が瞬時に グラフになり、多い順に並び替えもできるコンピューターソフトを活用しました。集計を短時間で終え、「男子」



「女子」、「クラス全体」の3つのグラフができ、考察が始まりました。

ここでは、「目玉マーク」を使うことで、どのグラフ、または、どのグラフとどのグラフを見た結果なのか、それぞれの意見の異同関係を明確化しました。クラス全員の意見をカードにして、黒板上に貼り、男女別に集計することで、より多くの分析の視点が生まれてくることを子どもたちは実感していきました。



大阪市立大学の木原俊行先生からは、「各教科固有の技能・表現を駆使し、『思考力』を高めるためにも、情報機器を活用してほしい」といったご指導をいただきました。

図画工作科



みやわき みつこ
宮脇 美津子

4年 風に乗って旅しよう



「どんな風に乗ってどこに行くと楽しいだろう。」旅をする場所やそこでの様子を想像し、水彩絵の具を使って表現していく学習を行いました。本時では、目に見えない風をいかに表現すると表したい風の感じが出るかを考えました。

前時の模様作りで描いた絵の中から2枚を選び、風に見立てて感じたことを話し合いました。「嵐のような強い風だ。」「こっちの絵は弱い風が吹いているみたい。」まず、強く感じた理由を探ることにしました。「太い線で描いているからじゃないかな。」「濃い色を使っているからだよ。」子どもたちは、線や色などの様々な造形要素に着目して理由を言います。そこで、一つの要素について深く考えることができるよう造形要素のまとめりごとに理由を聞き、色、濃淡、線、表現技法に分けて板書することで、風を描く際の工夫の観点の異同を明確にしていきました。

そして、「私の描きたい風は、葉が少しゆれるぐらいの優しい風だから、水の量を増やしてなめらかな線で描こう。」など、工夫の観点を明確にもって、表したい感じに合わせながら描いていきました。

香川大学の安東恭一郎先生からは、「グループによる表現の吟味の仕方」「発達段階による表現と意味的世界の関連」などについてご指導をいただきました。





3年 明かりをつけよう



豆電球と乾電池をつないだ回路を使って、どんなものが電気を通すか調べてきた3年生。前時までに空き缶、硬貨など、身の回りにある金属が電気を通すことが分かってきました。

「でも、長い金属の棒や大きな金属板も電気を通すのかな？」

本時では、まず、極端に長い金属棒や大きな金属板を提示し、それぞれについて、電気を「通す」「通さない」という意見をもたせ、話し合いを展開できるようにしました。

「電気を通す派」の子ども達は、ものの材質に着目して追究してきた既習内容を基に、「金属だから同じように電気を通すだろう」と考えていました。そこで、「ぼくは長い距離を走っているうちに疲れてしまう。電気も長い金属棒を通っているうちに疲れてくるから流れない。」「大きな金属板の上では、電気はいろいろな方向に散らばってしまうから流れない。」など、ものの形に着目した「電気を通さない派」の意見を発表させ、その根拠の異同関係を明確にしました。また、その際、目に見えない電気の流れを説明するため、イメージ図を活用させ、意味を共有化できるよう配慮しました。

さて、いよいよ実験。「長い金属棒も電気を通したよ。」「大きな金属板も電気を通すんだ。」と結果が出揃ったところで、各グループの実験結果を表にまとめて板書し、結果を共有しました。このように自他の実験結果を比べて、「みんなの実験から、どんな形でも電気を通した」ということが分かり、「金属は電気を通す」という見方を強化することができました。

香川大学の理科教育の先生方からは、「イメージ図を活用した根拠の共有化及び吟味の仕方」、「金属に対する概念を形成する教材の在り方と反応の組織化」等についてご指導をいただきました。



特別支援教室「すばる」の取り組み

平成15年4月より特別支援教室の取り組みが始まりました。香川県下から通級を希望した学習障害、注意欠陥/多動性障害、高機能自閉症、アスペルガー症候群といった軽度発達障害をもつ幼児・児童・生徒を対象とし、主に教育相談や学習支援、社会性の育成支援、また保護者や学級担任への支援等を行っています。

学校では、学習のペースが合わず、十分に内容を理解できなかったり、自分の思いをうまく伝えられないために友達や教師から理解されずに苦しんだりしている子どもたちです。一人一人の得意とすることを生かした活動で自信をもたせることにより、苦手なことに向かっていく意欲を育てたり、分かること、できることの喜びを味わわせたりしていくことを大切にしています。

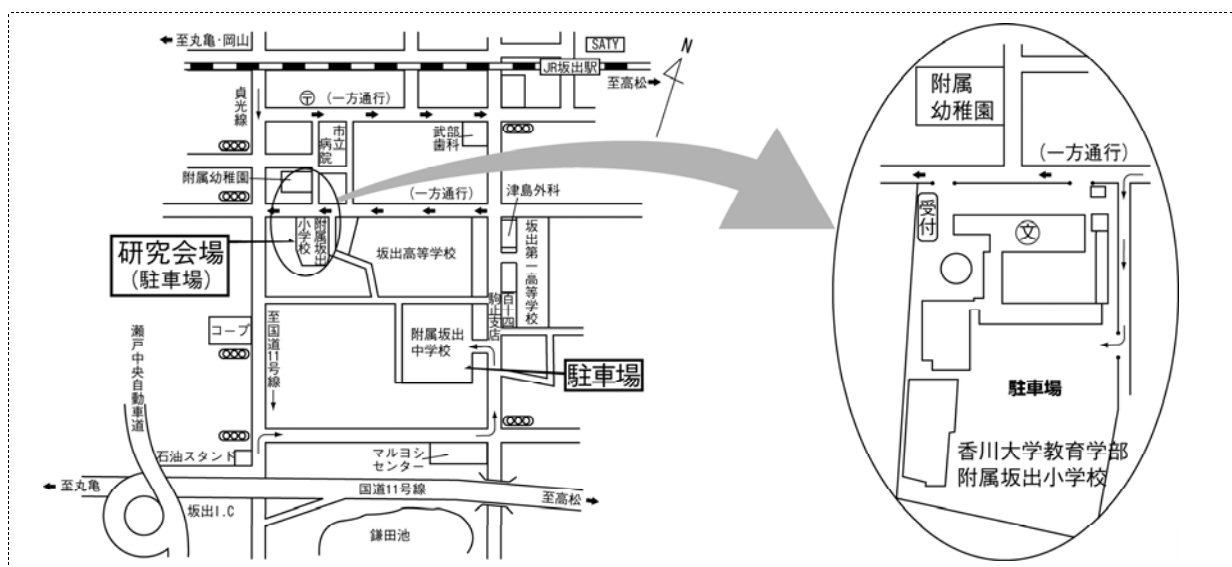
通級してきた子どもたちに対しては、附属幼・小・中・養護の各学校の教員が、1対1で向き合い、どのような支援が必要なのか、またどのような指導が効果的であるかを見出し、子どもたちに寄り添いながら学びを保障できる環境作りに努めています。

また、指導方法に悩むときは、専門医からご指導をいただいたり、スタッフが集まって悩みを出し合い相談したりしながら解決に向けての手がかりを得ています。

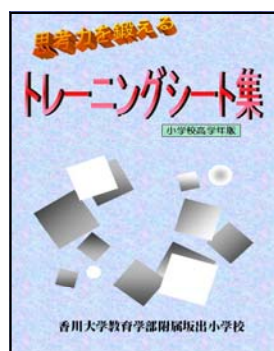


附属坂出小学校へのアクセス

- 本校の位置 JR坂出駅下車，南口より徒歩で約10分です。
坂出インターチェンジより，北へ車で約5分です。
- 駐車場 附属坂出小学校または附属坂出中学校（徒歩約4分）の運動場をご利用下さい。



研究図書紹介



(定価 500円)

思考力を鍛える トレーニングシート集 (小学校高学年版)

「思考力」を鍛える問題が、この1冊の中に網羅されています。解答及び解説付きで、印刷してすぐ使えるのでとても便利！朝学習等の充実に、ぜひご活用下さい。



(定価 1800円)

成功する少人数指導

～困ったときにすぐ役に立つ
Q&A集～ (明治図書)

なぜ今、少人数指導なのか、単元編成は？学習指導は？
Q & A方式による解説や具体的実践例などを掲載しております。各校での実践の際のご参考になれば幸いです。

研究会当日にも販売を予定しております。

あ と が き

「授業コーディネート」それは、教材の開発から反応の組織化まで、教師の力量を問われるものです。私たちはこれまでに「思考力」に研究の焦点を当て、「目標レベル」「単元レベル」での研究を進めてまいりました。そして本年度は、「学習指導レベル」の研究を進め、キーワードとしてこの「授業コーディネート」を掲げました。教師の指導力が問われ、授業力を向上させる必要が叫ばれている今だからこそ、「授業コーディネート」に価値を見出し、研究会に向け、その成果をお見せできることをめざしております。どうぞ、多くの先生方にお越しいただき、ご指導、ご鞭撻をいただけますことを願っております。

編集委員

真鍋 佳樹	森山 敬三
三宅 永哲	佐柳 仁
小西 寛	東条 直樹

平成17年3月25日

香川大学教育学部附属坂出小学校
TEL 0877-46-2692 FAX 0877-46-5218
E-mail sakai@ed.kagawa-u.ac.jp